

『気象学と気象予報の歴史』お詫びと訂正・修正

丸善出版株式会社

お買い上げいただき誠にありがとうございます。本書の記述に間違いがございました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正申し上げます。

(最終更新日：2019.3.29)

ページ	誤	正
p.2 下から 7 行目	ギリシャ人たちは世界を	ギリシャ人たちは <b>自然</b> を
p.2 下から 6 行目	観察に基づいた自然現象として	観察に基づいた <b>た自然現象として</b>
p.6 5 行目	役に立たなかったのはなく	役に立たなかったの <b>で</b> はなく
p.7 11 行目	川としなければ	川としな <b>け</b> れば
p.11 下から 11 行目	向いたりすることなどは知られて いた	向 <b>く</b> ことなどが <b>が</b> 知られていた
p.13 9 行目	第一プラガ協会会議	第一プラガ <b>教会</b> 会議
p.29 下から 7 行目	ただし 1633 年のガリレイの宗教裁 判の後に、カトリック教会はコペ ルニクスにまで遡って地動説に関す る著述を禁書目録に載せ、これは 1835 年まで続いた	ただし、 <b>後に</b> カトリック教会はコペ ルニクスにまで遡って地動説に関す る著述を禁書目録に載せ、これは 1835 年まで続いた
p.31 10 行目	述べ、気象学が	述べ、 <b>占星</b> 気象学が
p.31 下から 13 行目	占星術	占星 <b>学</b>
p.31 下から 12 行目	占星術	占星 <b>学</b>
p.35 6 行目	直接的に見える形	直接 <b>目</b> に見える形
p.35 10 行目	ガリレイはこれらの発見を 1610 年 に「星界の報告 (Sidereus Nuncius)」 と題して出版した。	ガリレイはこれらの発見の <b>一部</b> を 1610 年に「星界の報告 (Sidereus Nuncius)」と題して出版した。

ページ	誤	正
p.37 15行目	役立つための組織的なかつ目的意識を持った事実の蓄積やその考察などの共同作業	役立つための組織的なか→目的意識を持った事実の蓄積やその考察などの組織的な共同作業
p.38 9行目	デカルトは思想書『パンセ』などを書いた哲学者として知られているが、彼はベーコンとは	デカルトは『方法論序説』などを書いた哲学者として知られているが、彼はベーコンとは
p.39 24行目	19世の	19世紀の
p.44 見出し	王立学会	王立協会
p.55 下から3行目	地球表面の摩擦	地球表面との摩擦
p.68	ヴィヴィアンニ	ヴィヴィアーニ
p.69 10行目	真空である考えた	真空であると考えた
p.82 15-16行目	こと利用した	ことを利用した
p.86 最下行	感部を温らせた	感部を湿らせた
p.88 下から 12行目	雨量計を庭と	雨量計を自宅の庭と
p.89 下から8 行目	開発しようとした.	開発しようとした (図4-16).
p.89 下から4 行目	ものだった (図4-16).	ものだった-(図4-16).
p.90 図4-16	レンがったとされるウェザークロック	レンが 1663年に王立協会に提出したウェザークロック
p.91 7行目	自動記録装置が必要となる	しかし、自動記録装置が重要となる
図4-18	気圧高度の考え方	気圧高度の考え方.
p.99 4行目	他の多くの科学と異なって	他の多くの科学分野と異なって
p.101 7行目	この『コスモス』の	なお、この『コスモス』の

ページ	誤	正
p.103 下から 10 行目	クプファー	クッパ <del>ー</del>
p.103 下から 6 行目と 4 行 目	クプファー	彼
p.104 1 行目	クプファー	クッパ <del>ー</del>
p.119 下から 12 行目	軽い水蒸気が水滴となつて凝結し て大気から抜けると	軽い水蒸気が凝結して水滴となつて 凝結して大気から抜けると
p.120 13 行目	発展ための基礎	発展のための基礎
p.121 8 行目	アメリカ北西部の	アメリカ北東部の
p.126 下から 3 行目	この極域からの	これらの極域からの
p.128 下から 9 行目	利用した電磁石	利用した電磁気
p.129 下から 2 行目	そのため彼は自らの研究分野であ る電磁気学を	そのため彼は自らの研究分野である 電磁気学を
p.169 1 行目	などの熱素説	などの熱素説
p.182 5 行目	高層気象気象の	高層気象の
p.178 9 行目	この地球規模の大気循環が高低気 圧のエネルギーに関連している	この高低気圧のエネルギーが地球規 模の大気循環に関連している
p.182 15 行目	しかも経度方向に移動するため	しかも経度方向にも移動するため
p.186 5 行目	郊外トラップに	郊外トラペスに
p.191 3 行目	このようにマルグレスの	これらのマルグレスの
p.194 下から 6 行目	彼はこう述べている	彼は別な科学誌でこう述べている

ページ	誤	正
p.203 9-10 行目	ビヤクネス・ビヤクネス	ヴィルヘルム・ビヤクネス
p.210 1 行目、3 行目	水路学	水文学
p.210 13 行目	一方で航空のための	一方でそれは航空のための
p.212 15 行目	先導している	先導する
p.212 下から 12 行目	研究環境はあまりよくなり	研究環境はあまりよくなり
p.224 1 行目	ヘルゲン学派	ベルゲン学派
p.228 5 行目	ベルシェロン・フィンデセンの説	ベルシェロン・フィンダイセンの説
p.237 23 行目	高層気象台の建議	高層気象台建設の建議
p.238 11 行目	兆候として高層から	兆候が高層から
p.240 18 行目	東向き往路際に	東向きの往路の際に
p.241 下から 7 行目	少なくとも対流圏上端	少なくとも対流圏上端
p.242 22 行目	彼はここで、	彼はそこで、
p.244 14 行目	これまでの長期予報手法に関する	これまでの長期予報手法に関する
p.245 10-11 行目	高層気象観測を行われるようになると	高層気象観測が行われるようになると
p.246 6 行目	ロスビーは天気図の	ロスビーは高層天気図の
p.246 7 行目	「長波」があること	「長波」が上層にあること
p.248 5 行目	いろいろの角度から	いろいろな角度から

ページ	誤	正
p.249 1行目	1~2日より先を合理的に	1~2日より先の <b>気象</b> を合理的に
p.252 14行目	アメリカ気象局で知り合った	<del>アメリカ</del> 気象局の <b>図書館</b> で知り合った
p.257 13行目	繰り返さないために計算手法や	繰り返さないための <b>計算手法</b> や
p.261 10行目	イギリスでは	イギリス <b>気象局</b> では
p.261 14行目	気象局の気象学者たちによって試された。しかしながら、長期予報について	気象局の気象学者たちによって試された <b>ものの</b> 、長期予報について
p.262 下から6行目	radio dection and ranging	radio <b>de</b> tection and ranging
P263 下から8行目	それらは航空機の離着陸に大きな脅威を与えて、ときおり原因不明の重大な航空機事故を引き起こしていた。	それらはときおり原因不明の重大な航空機事故を引き起こして、 <b>航空機の離着陸に大きな脅威を与えていた。</b>
p.270 下から 4行目	ペドロフスキー	ペドロ <b>フ</b> スキー
p.271 14行目	10-2-3 での課題	10-2-3 <del>で</del> の課題
p.275 下から8行目	近似を行うことによって1個の	近似を行うことによって <b>最終的に</b> 1個の
p.276 5行目	小さいエニアック	小さ <b>な</b> エニアック
p.295 3行目	人類が化石に燃料をそのまま	人類が化石燃料をそのまま
p.298 下から 10行目	与えられるが、出てくる解は	与えられて <b>も</b> 、出てくる解は
p.299 1行目	「ほんの少し異なる初期条件からスタートする2つの数値モデル実験の結果について、時間とともに広がる差を調査する」	「 <b>数値モデル</b> をほんの少し異なる初期条件からスタートさせて、 <b>それら</b> の結果について、 <del>一</del> 時間とともに広がる差を調査する」

ページ	誤	正
p.305 6 行目	他にないのではないと思われる	他にないのではないかとと思われる
p.305 下から 7 行目	それに沿った作業の実施は	それに沿った現業作業の実施は
p.308 5 行目	自由度は高いが国際的な	自由度は高いが決定事項に国際的な
p.308 下から 5 行目	水路学者	水文学者
p.310 9 行目	基づいて 1879 年春の	基づいて、1898 年春の
p.309 3 行目	限られており、当初の	限られていた。そのため当初の
p.312 下から 8 行目	第二次世界大戦後に	第二次世界大戦後に
p.314 6 行目	しかしながら	しかしながら
p.316 21 行目	研究のためのペルーを	研究のためにペルーを
p.318 14 行目	Infra-Rred	Infra-Red